日刊 動労千葉

85. 7. 2

No. 1979

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一―八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉砕！

許すな！7月答申

# 「三里塚」と結合した国鉄決戦の爆発で「分割・民営化」＝10万人首切りを粉砕しよう

## 「分割・民営化」攻撃の反動的本質を暴露する その5 最終回

「日刊動労千葉」は、国鉄再建監理委員会の国鉄危機―再建―「分割・民営化」答申が全くのペテンであり、十万人首切り―国鉄労働運動解体をとおして、国鉄労働者を侵略戦争へ動員するための日帝・中曽根の「戦後政治の総決算」をかけた攻撃であるばかりでなく、自民党、財界が「分割・民営化」に群らがり、トコトン食いつくしたうえですべての犠牲を労働者・人民に転嫁しようとする凶暴な攻撃であることを暴露・弾劾してきた。われわれは、第二の「定員法」ともいうべき「分割・民営化」攻撃をみすえきり、「三里塚」と結合した国鉄決戦の爆発で「分割・民営化」阻止、十万人首切り粉砕にむけ、全ての国鉄労働者の最先頭で徹底的に闘いぬくことを宣言する。

### 誰が「総裁」になろうと、国鉄労働者に犠牲を強いる方針は不変

われわれは、「分割・民営化」なるものが国鉄労働者にとっていかなる意味をもつのかについてみてきた。

国鉄をめぐる状況は、仁杉総裁の更迭にみられるように、監理委の七月末答申をひかえ緊迫の度を増している。しかし、監理委と国鉄官僚の路線的対立であるかのごとき「総裁更迭劇」も、実際は莫大な利権の分け前をめぐる対立以外のなにものでもなく、十万人首切りをはじめ、国鉄労働者にトコトン犠牲を強いる支配階級の方針に、いささかの対立も存在していないことを見ぬかねばならない。

そもそも国鉄危機は、体制的危機の集中的表現としていかなる解決の方法もないがゆえに、日帝・中曽根は「国鉄再建」に体制的危機突破―延命をかけ、目茶苦茶な攻撃を加えてきているのだ。

そうである以上、国鉄労働者は自らの生活と権利を守るため、反動・中曽根内閣を打倒する以外に生きる道はないのである。

### 〝再建〟論議埋没＝武装解除を拒否し、実力で活路を拓こう

われわれは、再建論議が敵の土俵にのっかり、労働組合自ら労働者の階級意識を放棄し、屈服を強制する反動的なものであり、ましてや支配階級内部の「抗争」に依拠し、「分割・民営化」が阻止できるかのような幻想をもつことなど論外である。

とりわけ、「国鉄を国鉄として維持するために働き度を高めよう」とか「職場と仕事と生活を守るために三本柱をクリアーしよう」と主張し、骨身を削って働き、出向や休職すれば国鉄が再建できるかのようなペテンをふりまき、組合員に当局の奴隷になることを強制する動労「本部」革マルは反階級集団であり、打倒・一掃せねばならない。

敵の攻撃を打ち破る道は、三里塚と結合した国鉄決戦の爆発で、反動・中曽根内閣を打倒する以外にないのだ。

### 「過員」を武器に転化して闘おう

今日、十万人首切りにむけた当局の攻撃は「過員」を焦点に強行されてきている。

動労千葉は、国鉄労働運動総体の屈服、後退の中で、労働組合の原則を堅持しつつ、創意工夫をこらした抵抗闘争を展開してきた。「60・3ダイ改」では「3・26三里塚」への三度目の五割動員実現の闘いと結合させて唯一、実力闘争を貫徹し、当局の攻撃に一定の歯止めをかける成果をかちとってきた。

千葉局は、こうした動労千葉を破壊すべく恐る恐る攻撃を開始してきている。すなわち、「過員対策」として駅へ助勤に行った八三名の仲間に対し、「名札」未着用を理由に「助勤解除」を命じる暴挙を行った。

しかし、当局の攻撃は何ら整合性がないがゆえに、弱点をさらした脆弱なものである。動労千葉は、こうした事態を予測したうえで当局の矛盾・弱点を見すえ、「過員」を武器に転化して闘いぬくことをとおして確実に当局を追いつめている。

動労千葉の組織力・団結力こそ三里塚闘争を闘いぬいてきたことに裏打ちされたものであることに自信と確信を深め、三里塚二期阻止、「分割・民営化」―十万人首切り粉砕の闘いに勇躍決起しようではないか。（了）

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！